

2歳5箇月期双生児の会話能力の 発達に関する記述的研究

江 端 義 夫

(1996年9月9日受理)

A Descriptive Study on the Development of Conversational Competence of Two - years - and - Five - months Old Twins

Yoshio Ebata

The purpose of this study was ① to find the 5 patterns of the conversational competence in the field of the language development of twins, and ② to describe the concrete examples which could be seen in their daily lives.

The 5 groups of cognitive competences and in conversation are as follows:

- 1) A recognition of speaker's intention: They can answer utterances based on their understanding of the speaker's intention.
- 2) A cognition of self awakening: They can understand the speaker's attitude and then insist on their purposes.
- 3) The use of rethoric: They can talk with nature and animals.
- 4) Their mutual interference: They try to imitate the expressions from each other.
- 5) The generalization of the words learned already: They generally use to apply the learned expression to others.

Those 5 competences are interrelated with each other. How to choose their patterns differs individually.

はじめに

本稿の構成は次のとおりである。

はじめに
方法
被験者
実験調査
結果と考察
一、発話意図の認識
二、自我覚醒の認識
三、レトリックの認識
四、相互干渉の認識
五、普遍化試行の認識
おわりに

人間のことばは不思議なものである。人間の歴史がはじまって以来、人間はどうしてことばを習得し創造活動を行い、個性のちがう個体同士が意志疎通を行い得るのであるかと考え続けてきた。さまざまな学説が提示され、それぞれの時代に応じた論議がなされてきた。現代の流行は、チョムスキーの言語生得説であろう。どの子にも備わっている普遍的な言語能力が、一定の枝分かれ規則に基づいて分化し、ルールを形成していくものだとされている。確かに、一個人の言語の形成については、それとして納得するところがある。

しかし、個体を越えた複数の人間に対して、どうして言語的意味が伝達されるのかということについて、十分な説明が無いと思われる。ラングとしての言語について、しかも内省による言語の規則化が少なくないのだが、筆者が知りたいのは、自然言語の中の言語伝達である。言語体系が個人ごとに異なるというのが、最近の考え方である。そうならば、どうしてことばが

(1) 問題の所在

相手に通じるのかというのが疑問である。仮に個人ごとに少しずつその体系が異なりつつ、ずれていくのだとしたら、実際の姿を知りたいものである。

そこで、一卵性双生児の言語発達を研究することにより、ラングの異なる同士がどうしてランゲージュを形成していくのかを実際の生活の中での会話を観察することによって分析してみたいと思う。環境も同じで教育も同じなら、全く同じ人間が出来ても良いはずなのに、かなり違う個性の人格が形成されていく。その様子を見ると、DNAの中に既に一生涯の形質は組み込まれているのではないかと思ってみたくなるほどである。しかし、これに対する異論は当然あり得るであろう。

今まで多くの研究は、言語の単位を細かく切って要素を論じたものが殆どであった。筆者は、対話の場面を取り上げて、その会話力をこそ人間の社会的な力の獲得であると考えてそれを単位とすることにした。複雑な思惑の混ざり合った会話が今後の研究の基礎になるべきだと考えてのことである。

本稿は2歳5箇月の双生児が31日間に語る会話を記録し、分類した記述的研究である。

(2) 本稿の概要

B 6版カードには、一箇月で約831枚の会話が記録できた。これを会話能力の発達から分類した。はじめの「発話意図の認識」では質問に対する答えが出来ていく実際に、具体的に辿り得るであろう。子供同士の葛藤や嫉妬や心情が場面に即して表現されている。次に「自我覚醒の認識」では、相手を褒めたり正義感を表明したり我慢したり理由づけを試みたりして、精一杯に自我を顕現する様子が見られる。三番目の「レトリックの認識」では月がこちらを向いたとか月に向かって呼び掛けたりして、あたかも自然物が生きているかのごとき待遇を受ける会話の例を取り上げる。四番目の「相互干渉の認識」では双生児が互いに表現を模倣しあったり一方が言い間違ったのを片方が言い改めるといった相互の協調について取り上げる。これを見ると双生児が相手のことばを非情に繊細に聞き取っているさまを確認することが出来る。最後の「普遍化試行の認識」では可能動詞の連用形を要求表現に適用したりモチョットモと言ってみたりとか、語の汎用例が見られる。

以下、「方法」及び「結果と考察」の文章が続く。

方法

被検者 双生女児①, 1973年12月11日生

双生女児②, 1973年12月11日生

居住：福山市引野町高屋団地、0才～調査時。

家族：家族には姉の③(1972.12.24生)と父と母とがいる。家族は5人。

実験調査

- (1) 自然観察法
- (2) 24時間随時に聴録する。あわせて、1ヶ月1度の24時間調査を録音する。
- (3) 絵カード調査と構音調査を定期的を実施。
- (4) 本稿の資料は、1976年5月1日～5月31日の31日間に記録された831会話例である。

結果と考察

一、発話意図の認識

2歳5箇月の対象双生女児①, ②が、5月のはじめから順に月末に向かうにつれ、対話力を高めていくようすが以下の実例によって確かめられる。

〈通し番号・11421例〉S.51.5.5, p. m. 1:00

(父が子供の布団を敷くのに、向きをまちがえた。)

③ あれ、少しちがうねえ。

① ハンタイニ シーダ ノヨ。反対に布団を敷いたのよ。

② アッ、フー。あっ、そう。

(釈) 荷車がかみ合い会話が見事に成立している。

〈通し番号・11422例〉S.51.5.5, p. m. 4:58,

(父の書斎で①, ②が印鑑のふたを開けようとする。)

① コレワ。これは何? (小声で) 一② 沈黙

② テケテ ミル ノー。明けてみるわよ。

③ やってみなさい。一①, ②

(釈) 提示し、許可を求めて、許可されるという会話。

〈通し番号・11435例〉S.51.5.5, p. m. 8:00

(三姉妹の長女③が、卒先して就寝前の小用に行き、母にほめられた。それを見て、Mが言う。)

① sa¹ugaon¹ ɛ:t f a n. さすが立派、お姉ちゃん。

(釈) 2歳半の子が、すでに姉を賞賛して、演技の発言をすることができているのに驚く。

〈通し番号・11478例〉S.51.5.7, p. m. 5:01

(父の書斎に来て、物の名を覚えようとする。)

① コレ ナー。これ、何?

② エンピツケズリ。えんぴつけずり。

③ ɛ mpt f kē 3 u r i えんぴつけずり。

(釈) むづかしい発音でもかなり正確に、真似をする。

〈通し番号・11479例〉S.51.5.7, p.m.6:30
 (ドアの音。祖母の掃宅を聞きつけて、言う。)

㉓ oba: tʃa ʃi kɕita jō. おばあちゃんが来たよ。
 (実際に祖母の顔が見えると、甘い声で言う。)

㉓ oba: tʃa ʃa ʃa おばあちゃん!
 (祖母) ハイ。はい。
 (釈) 普通の顔と、甘い顔との二つの心情を、使い分けられる。

〈通し番号・11481例〉S.51.5.7, p.m.7:15
 (書斎から出てきた父に尋ねる。)

㉓ S ɕjundatta すんでしまったの?
 ㉓ マダ スンデ タイ ㊦。まだ済んでないよ。
 (釈) 状況と時間を判断して、大人びた会話をする。

〈通し番号・11483例〉S.51.5.7, p.m.7:37
 (不気嫌な㉓が、姉の㉓に反抗してすねる。)

㉓ イッテ。行ってよ。
 ㉓ イヤ ヨー。嫌よ。
 ㉓ バターン シチイデ。アバーチャン トコエ イキナシヤイ。戸をバタンとしめないで。お祖母ちゃんの所へ行きなさい。
 ㉓ だまって、戸をしめてしまう。
 (釈) 3.5歳の㉓と2.5歳の㉓との葛藤が出ている。

〈通し番号・11487例〉S.51.5.8, a.m.7:18
 (散らかったおもちゃを、かたづけさせられている。)

㉓ モー タイ ㊦。もう、ないよ。一父
 ㉓ まだあるよ。一㉓
 ㉓ タイ ㊦。ないよ。一㉓
 ㉓ お人形がある。一㉓
 (父の視線を追い、残っていた人形を取りに行く。)
 (釈) 自己主張をしてみても、父と張り合ってみた。

〈通し番号・11505例〉S.51.5.8, a.m.12:16
 ㉓ Jampoiitena katta nojō. 散歩に行つてなかったのよ。
 ㉓ 下コエ イッタ ㊦。どこへ行ったの?
 ㉓ Junaba' de. 砂場で。
 (釈) 砂場で遊ぶことは、㉓にとっては「散歩」という概念の中に含まれていないことを示している。

〈通し番号・11509例〉S.51.5.8, p.m.5:42
 (夕食後、父が窓を開けたときのことである。)

㉓ アチユイ ㊦。暑いのか?一㉓
 ㉓ コー ヤツテ。こうやって開けるのか?
 ㉓ ㊦。そう。
 ㉓ マド アケタ ㊦。窓を開けたのか?一㉓
 ㉓㉓ 大笑
 (釈) 共通の関心事に、状況読みができてい。「暑

い一窓をあける」の語用論的な過程が見える。

〈通し番号・11516例〉S.51.5.8, p.m.6:40
 (長女の㉓と三女の㉓とが大声で口論している。)

㉓ ユツテ ナカッタ ㊦。言つてなかつたよ。一㉓
 ㉓ ユツタ モン。言つたんだつてば。一㉓
 (㉓が㉓を叩こうとする。㉓が逃げる。)

㉓ ㊦。コワイ。ああ、こわい。一㉓㉓
 (釈) ㉓の状況判断の心情表現に、輝きがある。

〈通し番号・11526例〉S.51.5.9, p.m.5:00
 ㉓ マドオ シメテ キテ。窓を閉めてきて。一㉓
 ㉓ *mu ikara. 寒いから?一㉓
 (釈) 「ハイ」との返事の前に、心情語を出して、意図を問うのが㉓のやり方である。

〈通し番号・11533例〉S.51.5.9, p.m.7:30
 ㉓ オカーサン コワイ。お母さん、怖い?一㉓
 ㉓ コワイ ㊦。怖いよ。一㉓
 ㉓ コワイノ ヤサジノト ドッチガ オオイ。怖いのと優しいのと、どっちが多いの?一㉓
 ㉓ コワイノ。怖い方。
 (釈) 完璧に対話ができてい。準体助詞「ノ」も使用できる。

〈通し番号・11541例〉S.51.5.10, a.m.6:31
 ㉓ アダダ ㊦。あげたよ。一㉓ (洋服を㉓にわたす。)

㉓ アダタツテ ナニ。あげたって、何?一㉓
 ㉓ フク。服。
 ㉓ オチトンガ。“オチトンガ”
 ㉓ オチトンガツテ ナニ? “オチトンガ”って何?
 ㉓ オブトンガ。お布団が。
 (釈) 母の言い訳を聞き返して、正確を期すAの対話のしかたが出ている。

〈通し番号・11542例〉S.51.5.10, a.m.6:34
 ㉓ オベンジョワ。お便所へは行ったのか?一㉓
 ㉓ イッダ ヨー。オバーチャント イッジョニ。行ったよ。おばあちゃんといっしょに。
 ㉓ よく、しゃべるね。(一人ごと)
 (釈) 祖母が来ていて、彼女といっしょに、朝の小用を済ませていた。そこで、母の問いに対して、誰と行ったのかを追加して答えた。余分なことまで足して答えた母は理解している。

〈通し番号・11557例〉S.51.5.10, a.m.6:56
 ㉓ アッチニ デイットル ㊦。あっちに(カメラ)入っているのか?
 ㉓ ㊦。あそこにカメラが入っている。一㉓

(釈) ハをアと言ひ損なうAがいる。ことばを手直して、㊶が正しく言い改め教えている。

(通し番号・11703例) S.51.5.12, a.m.7:40

- ㊶ スコシダケ ハイットル。少しだけ入っている。
(㊶が飲み残した牛乳が、卓上のグラスに残っている。それを㊶が飲んでしまう。父がとがめる。)
- ㊸ そんな、乞食のようなことをしては、いけませんよ。
- ㊹ (力なく、小声で) ハイ。はい。

(釈) 場面をよく理解している。ハイという返事があらたまり場面でのものであることをよく示す。

(通し番号・11754例) S.51.5.14, p.m.5:00

(洗濯バサミをいくつもつなげて、片手の指が開いたような形をつくり、母に見せる。)

- ㊶ デキタ ノヨ。できたのよ。一㊶
- ㊸ ナニガ。何が?一㊶
- ㊹ パラ。バラの花。一㊶

(釈) 機知というものの素晴らしさ、ものを何かに見たてて、抽象化し、なぞらえていく能力というものを示している。比喩化、たとえる力、見たてる力、なぞる力、類推力などの基本とも言うべき力である。

(通し番号・11833例) S.51.5.21, p.m.6:14

(食事中、人参の入った五目飯に注目して)

- ㊶ コレ ナニ。これ、何が?一㊶
- ㊸ ワカルデジヨ。分かるでしょ?
- ㊹ ワカラン。分からない。
- ㊺ ミンジン。人参。(傍の長女が教える。)
- ㊻ ジンジン。人参。(まねをしたが、 μ i ができない。)

(釈) 対話する力は十分についている。「ナニ」という語を頻発して、語をふやしていく。しかし、「に」「 μ i」は発音が困難である。「ナニ」は言えても、「ニン」は後半の「ジン」に誘引されて、正しく発音できなかったのであろう。「ニン」と「ジン」との単位が結合したとき、後半の「ジン」に認識の視点が定まるらしいのである。「ニンニン」とはならなくて、「ジンジン」と発音したところが、きわめて示唆的である。

(通し番号・11933例) S.51.5.22, a.m.8:19

(朝食時、おもちゃのトラックを卓上で動かして遊ぶ。㊶が1歳8ヶ月の時、家族で海水浴に出掛け、軽トラックの荷台に乗ったことを思い出して言う。)

- ㊶ 了i j kan jento kore μ i nottjatta no. 新幹

線とこれに、乗られたのよ。(方言敬語「〜チャッタ」)

- ㊶ だれが?
- ㊸ オトーシャン。お父さん。
- ㊹ いっ。
- ㊺ ジュット マエ。ずっと前に。

(釈) 10ヶ月も以前のことを覚えていて、おもちゃのトラックとの連想で、海水浴に行った時のことを言ったのである。「ずっと前」の観念が、成人と変わらないものかどうか、はっきりしない。

(通し番号・11986例) S.51.5.25, a.m.6:47

(起きて朝食までの間に、父が㊶に、干しぶどうとお菓子の入ったお盆を手渡した。)

- ㊸ テレビノ マエニ オスワリシテ タベルノヨ。TVの前に正座して食べなさいね。
- ㊹ タッテワ イケン。タッテワ イケン。立って食べてはだめ?立って(食べる)のはいけないのか?
- ㊺ ツーヨ。タッテワ タベテワ イケナイ。そうよ。立って食べてはいけないよ。

(釈) 方言話法「イケン」が見られる。もう正確に、その用法が身についている。感心である。しかも、立食が家の中では禁じられていることを承知の上で、さらに問うてみるという、したたかさが出てきていて興味ぶかい。交渉したいでは、ルールなどというものは破れるものだという考え方ができている。

(通し番号・12006例) S.51.5.25, p.m.8:50

(入浴後、3人娘を寝かせようとするが、まだ起きています。母は既に疲れて寝込んでいます。父は新聞を読んでいる。三人は、ごそごそと起き出してきて、父をのぞきこむ。)

- ㊸ オトーチャン ネテタ。お父ちゃん、寝ていた?
- ㊹ (だまっている。)
- ㊺ ネテナイ。寝ていない。
- ㊻ tjimbum jomu. 新聞を読む。

(釈) ㊸と㊹と㊻との文の連繋がよくとれている。これで、ストーリーはとれている。ただし、㊸は、まだ、アスペクトが十分には習得できていない。「〜テイル」を使うべきところで、終止形を使っている。これが気になる点である。㊹は「〜テイル」を上手に使っているし、㊸も「〜テイ(イ)タ」を使っている。

(通し番号・12026例) S.51.5.26, p.m.7:00

(父が出張から戻り、おみやげを買ってきた。)

㉔ オトーサンノ オミヤゲ。お父さんのおみやげよ。

㉕ オトーシャンガ カツテ キタ ア。お父さんが買ってきたの？

(釈) きのうまで、㉕はアスペクトの「～テイル」が十分には使えなかった。しかし、今日は、「～テキタ」を上手に使いきった。一日のちがいで、こんなに習得してしまうものなのだ。多分、長女の㉔が昨日「～テイタ」を使ったのでそれを記憶して今日、使ってみたのである。これで㉕も、アスペクトを習得した。

(通し番号・12110例) S.51.5.30, a.m.8:44

(朝食中にカルピスを出した。カルピスの中に氷が入っている。氷は、子供たちにとって、初めての経験である。見るのも、食べるのも初めてである。)

㉖ コーリ アゲヨー。氷をあげよう。

㉗ コーア。コーア。コーリ ア。氷。氷。氷か？

㉘ コーア。氷。(グラスの中の氷をとり出す。)

㉙ 手に持つもんじゃないの！

㉚ コーア。氷。(めずらしそうにしている。)

㉛ ガーチャンニ モラッタ ア。母ちゃんにもらったの？

㉜ アー。

㉝ コレ ドコニ アッタ ア。これどこにあったの？

㉞ レーアコニ アッタノ。ダシタ ノ。冷蔵庫にあったのよ。それを出したのよ。

㉟ ダシタ アー。出したの？

(釈) 何気ない「氷」が、子供たちにとって初めてのものとして提出されると、こんなにも感動的に受けとられるものなのか、何度も口で言ってみて、手でさわって確かめている。出てきた場所をたしかめようとする。魔法としか考えようがないらしいのだ。

(通し番号・12125例) S.51.5.30, p.m.5:32

(夕食後に、ごはんをノリマキにしてくれと母に頼む。)

㊱ ヤッデー。ヤッデー。やって、やって。

㊲ ヤッデーダッテ。やって、だって。(粗雑な言葉遣いをするので、母はあきれた表情をしている。その顔を見て㊱は悟り、言い直す。)

㊳ ヤッテ クダシヤイ。やってください。一㊳

㊴ ハイ。はい。

(釈) 言い直せ、と言わなくても、相手の表情を読んで、改めるようになった。コミュニケーションの力が総合的についてきたことを示し

ている。

(通し番号・12178例) S.51.5.30, p.m.6:50

(父が夕方、居間を掃除しようとしている。)

㊵ オアージ スル ア。お掃除するよ。

㊶ オトーハンガ スル ア。お父さんがするの？

㊷ イツモワ ダレガ スル。いつもは誰がする？

㊸ オカーハン。お母さん。

(釈) 平常は誰が掃除をするかということを知っていて、それとは違う事態を見て、話題が展開したのだった。

(通し番号・12188例) S.51.5.31, a.m.7:54

(朝食前に、㊸は感冒のためか、高熱がある。小児科へ連れていくことに話が決まっていた。)

㊹ ミヨコ デクビ。アアビ ヒダ ノ。観世子は、あくびをした。あくびしたのよ。

㊺ ミヨコ オイシャシャンニ イク ノ。観世子は、お医者さんに行くのよ。

㊻ 下ーシテ。どうして？

㊼ ンー。コツチ。(腕をまくる。注射をする方の腕を見せる。)

㊽ デトカラ イクノ。後から行くのよ。

㊾ ヨハン ダベテカラ。ご飯を食べてから行くのよ。

(釈) 疑問詞「どうして？」に正しく回答されていない。医者には注射のために行くとの返答であろう。

(通し番号・12209例) S.51.5.31, p.m.4:41

㊿ カニ アツカチャン。アツタノ。蟹の赤ちゃんが、あったのよ。

㊱ 下コカラ デテ キタ ノ。どこから出てきたの？

㊲ ココカラ。ここから。

㊳ カニ アカチャン。蟹の赤ちゃん。

(通し番号・12203例) S.51.5.31, p.m.3:10

(ベランダで㊱㊲㊳の三人がヘリコプターの飛んでゆくを見つけて、母を呼ぶ。)

(㊱, ㊲, ㊳) ヘリコプター。ヘリコプターよ。一㊱

㊴ ヘリコプターワ ドコニ トンデ イッタ カネー。ヘリコプターはどこへ飛んでいったかね？

㊵ チラナイ。知らない。一㊵

(釈) 確認しえないことについては、推測よりも、事態を直叙するようにつけていた。㊱はそれに従ったのである。とかく、空想や絵本にふみこんだ答えを期待しがちだが、この家庭では科学的な表現を求めている。

(通し番号・12222例) S.51.5.31, p.m.6:20

(㊱が便所にいる。三女の㊱が、ふざける。)

㊦ ワルイ コト シテワ イケン フ。悪いことしては、いけないよ。一㊦

㊧ シデモ イー フ。してもいいのよ!一㊧

(釈) 理由がどうであろうと、言い張ってみるとい
う㊦の姿勢が見える。これは、この時期に主
体性が生まれるということであり、大切な成
長過程の一風景というべきである。

二. 自我覚醒の認識

自我の覚醒やユーモアの場面、あるいはしみじみ
とした叙情の感じられる場面などでの会話例をとり
あげて、人生に再び繰り返されることのない貴重な
表現の現実を眺めてみたい。それらの場面で、どの
ような言語のレトリックが作用していたのか、幼児
の精神形成上に、どのような言語状況が見られるか
を、言語形成と精神形成のことがらとして考察して
ゆくことにする。

以下においても、前の章と同じように、昭和51年
5月1日から5月30日までの1ヶ月間の会話カード
の内で、月の初めから順に見てゆき、注目すべき事
例をとりあげてゆく。

(通し番号・11486例) S.51.5.8, a. m. 7:00

(温い牛乳が朝食用に配られた。㊦の牛乳を冷い
ものと取りかえた。コップの牛乳に湯気がない
のを見て、Mが言う。)

㊦ mi 3 u ere ta no. 水を入れたの?一㊦

(全員、大笑い)

(釈) 熱いものに水を加えて、冷やすことを知識
として知っている㊦は、温い牛乳を冷ます際
にも、水を入れるものと類推して発言した。
常識しらずというわけで、笑われた。ものの
冷まし方に、放置しておくやり方と、冷たい
ものを加えるやり方とがあることを彼女は知
らなかった。

(通し番号・11491例) S.51.5.8, a. m. 7:20

(レモン茶のレモンをなめる。㊦が言いまちがいを
する場面である。)

㊦ kara i. からい。

㊧ カライ コト ナイデシヨ。辛いことなんかな
いでしょう!

㊦ ン? (未習得らしいのである。)

㊧ スッパイ。アイコチャン スッパイッテ イッ
タデシヨ。すっぱい。愛子ちゃんは、酸っぱいっ
て、言ったでしょ。一㊦

㊦ だまっている。

(釈) この会話の少し前に、㊦の姉にあたる㊧が、
レモンを tšippai (すっぱい) と言ったのであ
る。それを㊦は未だ未習得だったので、母に
㊦と比較して叱られたのである。じっと黙っ
て、たえているのである。

(通し番号・11493例) S.51.5.8, a. m. 7:21

(食事中、他の人の注意を本人にひきよせるため
に、わざと会話の主導権を取る。)

㊦ コレ チーニ。これ、何?

㊧ シッデルデシヨ。知っているでしょ?

㊦ ɲ u: ɲ u:. 牛乳。

㊧ ソー。

(釈) 既に知っている「牛乳」について、このよ
うにたずねる。これは、知らない物の名を聞
いて、覚えようというのではない。きっかけ
づくりに、「何」という問い方を工夫するらし
いのである。会話のレトリックというものを、
すでに2歳の子が、身につけているというわ
けだ。

(通し番号・11496例) S.51.5.8, a. m. 7:45

(母に叱られて、㊧が泣いている。㊧は黄色いタ
オルを探している。黄色いタオルは㊧の悲しみ
をいやすすがなのである。)

㊦ アイコチャンノ タオルオ サガシトイデ。愛
子ちゃんのタオルを、代りに探しておいで。一㊦

㊦ イマダ。イマ ナノ。嫌だ。嫌なの。一㊦

㊧ キョーダイラシク ナイ 冨ー。兄弟らしくな
いね。

(釈) ㊦は㊧へのライバル意識がある。又、独自
性も、しっかりと出てきているのである。

(通し番号・11506例) S.51.5.8, a. m. 12:16

(昼食を祖母が作っている。他の者は、すでに食
べはじめている。)

㊦ オバーチャン oro:ri ka. お祖母ちゃんは、お料
理か。

㊧ 冨ー冨。そうだね。

㊦ オバーチャン ジョージュ ネー。おばあちゃ
んは、料理をつくるのが上手だね。

(釈) ㊦は、上のように、人の心をよく汲みとつ
て、いたわりねぎらう表現を言う。㊦は、事
実を客観的に叙述する。㊦はそれを、心内話
にひきうつして、表現しようとする。もう、
二人の間に、大きなちがいが出てきている。
二歳で、こんなにちがうのである。

(通し番号・11577例) S.51.5.10, a. m. 7:56

(祖母が来ている。かたづけをしている場面。)

㊦ コレモ ナイナイシデ。これもかたづけて。一㊦

㊦ コレモ ナイナイチデ。これもかたづけて。一㊦

㊧ キョコ、ナイナイワ 赤ちゃんことばヨ、シマッテでいいの。一㊦

㊨ シマッテ。一祖母

(釈) 母に、幼児ことばの言い改めを注意された

㊦を、傍で見ていた㊨が、先に、それを言い改めて、使ってみせたのである。

(通し番号・11682例) S.51.5.11, a. m. 6:58

(自分の行為のあとしまつを人に頼むことへの抗議が、すでに3歳の㊦にはできる。)

㊩ さむい。閉めておいで。一㊦

㊪ Jamu i: 寒い?一㊦

㊫ ㄱ。シメテ オイデ。一㊦

㊬ シヤッキ オワーシャンガ アケダノカラ。先ほど、お母さんが戸を明けたのだから。(自分で閉めないで、頼むなんて、こすい。)

(釈) 母が閉めるべきなのだ、と自分の判断がのべられる。自己責任主義ができています。

(通し番号・11683例) S.51.5.11, a. m. 6:59

(朝食中、牛乳を「飲む」のを「食べる」と言いまちがえた。)

㊭ コレ ㄱベテ。これ(牛乳)飲んで。一㊦

(母に、牛乳をのんでくれと頼む。)

㊮ ㄱベテではなくて、ㄱンテ。一㊦

㊯ no nde. のんで。

(釈) ㊭が言い直す先に、側の㊯が、先に音ってしまった。㊭の出る幕がなくなった。㊯は喜ぶ。㊯の方が有利な場に立つことになる。子供同士のやりとりでは、よくある場面なのだ。

(通し番号・11696例) S.51.5.12, a. m. 7:31

(朝食中、厳密にものごとを言うか否かのやりとりと、かけひき。食卓に卵がないので、不思議がる。)

㊰ タマコワ。卵は?一㊦

㊱ 今日は、ないのよ。チーズがあるから。一㊦

㊲ チーヂュ 下コデ カーダ ノニ。チーズはどこで買ったの?一㊦

㊳ トーダ。遠くで。

㊴ トーダノ チョット ムコーノ コッチ。遠くの、ちょっと向こうの、こっち(の店)。一㊦

㊵ チヤウ。オミシエ。ちがう。お店(なの)。一㊦

㊶ 怒ってしまう。

(釈) 「遠く」と母が音ったのを、場所と視たのと、店と視たのとで、ちがいが生じた。固有名を㊴は考えて、その店への道程を説明しようとしたのである。しかし、妹は、普通名詞の「店」を回答した。このすれちがいは、おもしろい。

(通し番号・11791例) S.51.5.19, a. m. 8:51

㊷ キノー ダレト オフロニ ハイッタ。昨日誰とお風呂に入った?

㊸ オワーシャント。お母さんと。

㊹ ソレカラ。それから?

㊺ ㄱーチャント デイコト ミヨコト ハイック。姉ちゃんと愛子と親世子とに入った。一㊦

㊻ ウレシカッタ。嬉しかった?(返事なし)

(釈) 日常的な行為としての入浴については、嬉しさの感情を伴わないものらしい。遊びという感じではないのである。

(通し番号・11810例) S.51.5.19, a. m. 8:11

(夜、お茶を入れて、休憩することになった。)

㊼ チョット キューケー シヨ。ちょっと休憩しよう。

㊽ オトーハンモ。お父さんも?

㊾ イマ キューケーシデル ノ。アトカラ マク オシゴト ヨ。今休憩してるの。後から又、お仕事よ。

㊿ ミンチ キューケー。家族みんな、休憩。

(釈) 夕食後それぞれの時間を過ごした後、休憩のお茶を楽しむときの会話である。共通意識に至る様を見ることが出来る。

(通し番号・11813例) S.51.5.20, p. m. 5:25

(夜の静かさの中で、犬が鳴いているのが聞こえてくる。それが話題になる。)

㊿ ダレノ オト。誰の音?

㊿ イヌ。犬。

㊿ ダレジャー テイ。チニノ オト。誰ではない。何の音?

㊿ イヌノ コエ。犬の声。

(釈) 犬には「何」、人には「誰」を使うという区別を、㊿は未習得なのである。ところが、㊿は、更に、「声」をうち出している。これならば、「人の声」でも「犬の声」でも音える。このあたりは微妙である。連語の意味を適切に使えるか否かの対話である。

(通し番号・11894例) S.51.5.23, p. m. 7:45

㊿ マナナ。マナナ。“まなな”“まなな”

㊿ マナテ。“バナナ”よ。

㊿ マ。“マ”(発音の真似をさせようとする。)

㊿ マ。“マ”

㊿ マラテ。“ばらな”(バナナと発音することができない。)

(釈) ㊿が㊿の発音を矯正しようとするが、うまくなえをすることができない。マをマと音う。これは、身体の成長を待つより仕方がないよ

うだ。つまりは舌の未発達によるからである。
(通し番号・12064例) S.51.5.28, p.m.4:45
(ペランダでの会話。母は父の部屋にいる。)

㊦ 悪いことをする子は、よその子にするよ。一㊦
㊦ ミヨコ ヨシヨニ イク ノ。親世子, 他所に
行くの(よ)。一㊦ (しばらくして, ㊦が㊦に伝言
している)

㊦ ミヨコ ヨシヨニ イク ノ。親世子, 他所に
行く(ことにした)の。一㊦

㊦ アイコチャンモ イク ノ。愛子ちゃんも(他
所)に行く(ことにした)の。一㊦㊦

㊦ イク フ。フー。イキナサイ。行くの? そう?
生きなさい。一㊦㊦

㊦ ヨブニ 牙ーカミガ オツテ ㊦。他所に狼が
いますよ。一㊦㊦

㊦ ミヨコ イヤ ㊦。親世子, (他所へ行くのは)
嫌よ。

㊦ イヤナラ イーコ シナサイ。嫌なら, 良い子
をしなさい。一㊦

(積) たわいもない会話だが, 理屈をつけて, 納
得させ, 自分のことばで表現させるためには,
上の物語りは, これとして面白いものである。

(通し番号・12065例) S.51.5.28, p.m.4:55
(㊦が叱られた後, ㊦が同じように振るまう。)

㊦ アイコチャンモ ヨチヨエ イク ノ。愛子ちゃ
んも他所に行くの。一㊦

㊦ 牙ーカミガ イル ㊦。狼がいるよ。一㊦

㊦ イク ノ。行くの。

㊦ ジャー スグ デテ イキナサイ。じゃあ, す
ぐ出て行きなさい。(戸を明けて動作で示す。)

㊦ イヤン。イカナイ。嫌だ, 行かない。一㊦

(積) ㊦と㊦とは双生女兒である。互いに協調し
合う。先に, ㊦が㊦に叱られて, 外に出て
行きなさい, と言われた。これに㊦も応じた
のである。

(通し番号・12126例) S.51.5.30, p.m.6:03
(居間で絵カードの調査をしているところ。)

㊦ アイコチャンノ cippo: kci. アイコチャンモ
ノリタイ ノヨ。ミヨコチャンモ ノリタイ ノ
ヨ。オトーチャンモ ノリタイ ノヨ。ミンナ
ノリタイ ノヨ。愛子ちゃんの飛行機。愛子ちゃ
んも乗りたいのよ。親世子ちゃんも乗りたいのよ。
お父ちゃんも乗りたいのよ。皆, 乗りたいのよ。
一㊦

㊦ シンカンシェンデモ イー ノヨ。(乗るのは、)
新幹線でもいいのよ。一㊦㊦

(積) みんなで飛行機に乗りたいという。しかし、

一つ年上の㊦は, 「新幹線」でもいいと提言す
る。こういう, あれかこれかの選択的な発言
は, 一歩進んだものと認めてよい。

(通し番号・12182例) S.51.5.30, p.m.7:05
(電話器の側で, カードに子供の会話を書いてい
ると, ㊦が, 何をしているかと聞きにくる。)

㊦ オトーチャン 子ニ カイテル フ。お父さん,
何を書いているの?

㊦ ミヨコノ コトバ。親世子の言葉。

㊦ 子ンテ カイテル フ。何と書いているの。一
㊦

㊦ ミヨコワ オリコーツテ カイテル ノ。親世
子はおりこう, と誓っているの。(㊦は満足して,
姉の㊦の方へ, 行ってしまった。)

(積) what と how のちがいが使い分けできてい
る。ものごとに細かく注意を向けられるよう
である。

(通し番号・12194例) S.51.5.31, a.m.8:25

(今月の初め, ㊦は「ノム」と「タベル」の区別
ができずに, ㊦に直された。しかし, ㊦が, 今日
は, その同じ間違いをするが, ㊦はもう, でき
るようになっている。)

㊦ コレ フム。これ(のリンゴ), 飲む?

㊦ タベル。タベルト ユー ノヨ。食べる。食べ
ると言うのよ。一㊦ (㊦が黙っている。傍の㊦が
代りに言う。)

㊦ ミヨコモ タベタ ノ。親世子も食べたのよ。

㊦ 子ニオ。何を?

㊦ リンゴ。りんごを。

(積) 朝食時の風景である。誰かが言いまちがえ
れば, 正しい言い方を覚えてしまった子が,
代りに言うのであった。3人のうち, 誰かに
向かって言われたことばは, 黙殺せず, やは
り, しっかりと聞いているということである。

三. レトリックの認識

幼児は, 動物と人間とを区別せず会話できるもの
の思いがちである。したがって, 大人から見れば,
メルヘンふうに見えるが, 幼児にとっては, 普通の
ことであるのかもしれない。しかし, ㊦㊦㊦三人の
幼女は, あまり幻想的な言い方や, 詩的と俗に言わ
れる言い方をしない。何故, そうなのかは不明だが,
夢見るとき, 浮ついた表現が少ないのは, 驚くば
かりである。ただ, 父も母も, 日常会話で幼児の立
場からの発言をしてこなかったのが, 原因の一つか
もしれない。理詰めに語りかけ, 科学的にものを言

わけてきたからである。

以上のようにあっても、絵本や童話や音楽を好む情緒は失われていない。ところで、㉔と㉕との二人は次のような比喩表現を、2歳5ヶ月の5月1日から31日の間に行った。若干をとりあげてみよう。

〈通し番号・11429例〉S.51.5.5, p. m. 6:24
(ペランダにて)

㉔ ツギガ コッチ ムイタ ㉕。月がこっちを向いたよ。

(釈) あまり奇異なことではない。よくある例だ。

〈通し番号・11430例〉S.51.5.5, p. m. 6:25
(ペランダで)

㉔ チュキー オイデー。ネソネ チデー。月、こっちへお出で。寝てみて! 一月へ呼びかける。

(釈) こういう場面は、どんな子にもありうるのであろう。崇高な月であれば、なおさらである。

〈通し番号・11546例〉S.51.5.10, a. m. 6:46
(数日前のことを話題にして)

㉔ ハンブン。(月が) 半分(だった)。

㉕ 月が半分だったよね。

㉔ ピカ ピカ。

㉕ ツギガ。月がピカピカだった?

(釈) 母の常識では、月の輝きについて「ピカピカ」は、あたらない、という観念があるからである。

〈通し番号・11831例〉S.51.5.21, a. m. 10:20
(つみ木を二つ重ねて、足の下に置く。つみ木を、草履のように、ずらせて歩くまねをする。)

㉔ ソーリ。ソーリ。コレ ソーリ ㉕。一㉕

(釈) いわゆる「ゴッコ遊び」の一つと音っているであろう。何かに見立てて遊ぶのである。比喩といってもよい。こういう能力が、すでに、2歳半の子にも、備わっているのである。

四. 相互干渉の認識

同一環境で、同性ならば、双生女兒がたがいに言葉をまねし合うのは当然であろう。だが、㉔の方が体重もあり、ことばの発達が早かったので、しぜんに㉔が㉕のことばを模倣するという受動的な型ができてしまった。しがたって、行動も㉔が野心的となり、㉔が慎重になってしまっている。別に役割り分担ができあがっているというわけではないが、体力の成熟が早ければ、それだけ得なのである。

以下で、会話の例をあげるが、そのほとんどが、妹の㉔の方が先に発言し、姉の㉔がそれを真似ると

いうパターンになっているのである。体重が1kgもちがうと、何ごととも発達が早くなるので、いたしかたがないのであろうか。

〈通し番号・11438例〉S.51.5.6, a. m. 8:20

(父がTVの体換をまねて、体換をしている。それが、TVの体換のと同じだと母に伝える。)

㉔ テレビデ ヤッテター。TVでやっていたよ。一㉕

㉕ ツーネ。そうね。

㉔ テレビディ アッテタ。TVでやっていた。

(釈) ㉔は大きな声で言い、㉔は小さな声で独り音の形となった。だが、こうやって、互いの発音を模倣するから、似てゆくのだから、ということも言える。

〈通し番号・11501例〉S.51.5.8, a. m. 12:10

(酢豚のごちそうを見て言う。)

㉔ oi f o: n̄ :。おいそうねえ。

㉕ oi f i f o: n̄ :。おいそうねえ。

(釈) 二人が同じことばを発音した。㉔が先である。久しぶりに、こういうことがある。㉕の方が、ことばの発音が早く成人に近づいている。㉕は f i が音える。しかし、㉔は、2歳5ヶ月のはじめに、f i が不明瞭であったのである。そこが、このように、㉔のことばを真似する時にさえ、㉕は、自分なりに取得しえた発音の方を言い表したのである。

〈通し番号・11532例〉S.51.5.9, p. m. 7:30

(家族で、TVを囲んで見ているときのこと。)

㉔ オブーチャン コワイ。おばあちゃんは怖い?

㉔ ヤチャチャー。優しい。一㉕

㉕ ヤシャシー。優しい。[jaça ʃi:]

(釈) AとMとがそれぞれに、自分の考えている思いを述べた。㉔(姉)が先に返答し、妹の㉕が、つづいて答えた。ことばは同じ。発音が、異なる。㉕は㉔よりも、舌の発達が早く、口蓋化が進んでいる。

〈通し番号・11545例〉S.51.5.10, a. m. 6:46

(24時間幼児語調査の何日目かの日。絵カードの調査をしているところか。)

㉔ コレ タイヨ。タイヨミタイ。これ、太陽。太陽みたい(上)。

㉔ タイヨミタイ。太陽みたい(上)。

(釈) 「~ミタイ」などという助動詞が使えるようになるのは、相当に、表現の彩を楽しめるようになった証拠である。

〈通し番号・11803例〉S.51.5.19, p. m. 8:02

(食後の食器が、すでに流し台に持って行ってある。それを母に報告し、着めてもらおうとするらしい。)

㉙ ミヨコガ オイ下イタ ノヨ。観世子が置いておいたのよ。一㉙

㉚ アイコガ エオー下イタ ノヨ。愛子が置いておいたのよ。一㉚

㉛ ミンチガ オイ下イタ ノネ。皆が置いておいたのね。一㉛

(釈) 双生児の㉚㉛は、競い合って伸びようとしている。これは、大変よいことである。

〈通し番号・11809例〉S.51.5.19, p.m.8:11

(㉚は黄色のタオル、㉛は青色のタオルと色分けしてある。それぞれの個性のちがいを尊重して育てたいためである。その夜、各自の新しいタオルを出してもらい、それを抱いて寝ることになっている。)

㉙ ミヨコノ マチテ ナイ ヨ。観世子のタオルが出してないよ。一㉙

㉚ アイコノ マチテ ナイ ヨ。愛子のタオルも未だ、出してないよ。一㉚

(釈) 関心を同時に示すから、好都合である。

〈通し番号・11837例〉S.51.5.21, p.m.6:50

(食後のデザートに、冷蔵庫で冷やしてあった「イチゴ」が卓上に出された。それが冷い快さである。)

㉚ メダイ ネー。冷いねえ。一全員

㉙ チュメダイ ネー。冷いねえ。一全員

(釈) 双生児なのだが、1cm身長が高いのが妹の㉙である。㉚の方が、体重も1kgほど少ない。成長のおそい分だけ、ことばの発達も遅れていて、半月ほど、妹の㉙の方が早いのではないか。㉚は「冷い」の語頭音が脱落する。言えないからである。㉙は、舌をつかって「チュ」と言ってみている。

〈通し番号・11887例〉S.51.5.23, p.m.5:53

(襖に映った夕日を、二人で、じっと見て楽しんでいたが、ヤマの端にかくれて、それが消えてしまった。)

㉚ キチャッタ ネー。消えてしまったねえ。一㉚

㉙ キチャッタ。消えてしまった。

(釈) このばあい、発音の主導権は㉚(姉)が取った。「きえてしまうた」という古い方言でなく、「キ(ト)チャッタ」という共通語であるところが注目される。そういえば、父も母も、「～チャッタ」はよく使う。習得できる言語環境ではある。

〈通し番号・11955例〉S.51.5.24, a.m.7:30

(朝、TVの「子供ショー」で、紙に描いた渦の中にボールを入れるゲームをしていた。それを見ている。)

㉙ ナカニ イレレル ノ。渦の中にボールを入れるの。

㉚ ナカニ エレレル。中に入れる。

㉛ ナカニ ナカニ… 中に、中に、…。

㉙ コロント エレレル ノ。ころんと、入れるの。

㉚ コロンテ。ころんて。

㉛ コロンテ デテ キタ ネ。ころんと出てきたね。

㉙ コロント ハイチャッタ。ころんと入ってしまった。

㉚ ナカニ イレタッタ。中に入れてしまった。

㉙ ナカニ ハイチャッタ。中に入ってしまった。

(釈) 自動詞「入る」と他動詞「入れる」が使い分けできている。「～てしまう」過去完了形も、うまくできた。表現の幅が広がっている。

〈通し番号・12007例〉S.51.5.26, a.m.8:25

㉙ ハダカンボ。探んぼ。

㉚ アカボンボ。同上(二女)

㉛ ハカカンボ。同上(三女)

㉜ ハダカンボ。同上(長女)

(釈) 母が発音した単語を、三人が真似するのだが、それぞれに異なるのだから興味ぶかい。

五. 普遍化試行の認識

成人の日常言語が正用であるとすれば、それと異なる使い方は誤用ということになる。誤用は規範に照らせば逸脱であり、枠からはみ出しである。しかし、言語使用に制限があることを確かめ習得していく過程での必然的な現象であるから、これを言語運用の普遍化を求める自然な言語行為と考えることにしたい。

〈通し番号・11460例〉S.51.5.7, a.m.10:57

(訪問して泊っている母方の祖母に、ヨーグルトのピンの包み紙をはがしてほしいと頼むときの言い方である。)

㉙ ナキテ。出来て！一祖母

(釈) 可能動詞の「できる」を連用形にすれば、「できて」である。ちょうど、「書く」の連用形は「書いて」であるのと同様に、やさしく頼むときの言い方として応用したのであって、合理的である。しかし、可能動詞の連用形は、それができないのだ、という例外が未習得だっ

たのである。だから、「飲んで」とか「書けて！」、「醒めて！」も言えないということ、この機会に学習してしまったことになる。たいしたものだ。

(通し番号・11471例) S.51.5.7, a. m. 12:05

- ㊦ チカチャンノ アバチャン オナイ ㊦。ヒカチャンノ アバチャン オナイ ㊦。オニニチャン下。オナイ ㊦。ドヨニ イッダ カチー。周ちゃんのおばちゃん、いないよ。周ちゃんのおばちゃん、いないよ。お兄ちゃんと。いないよ。どこに行ったかなあ。

(釈) 自問自答。「居る」を広島では「イル」と「オル」との両方に使う。だから「イナイ」も「オナイ」も存在すると考えたのだろう。ことばは合理的体系ではないから、「オナイ」は無かった。存在詞である「イル」(居る)を「イナイ」としたルールに基づいて、「オナイ」と言ったのだろうか。五段活用動詞と見なしたとすれば、「オラナイ」でもよかったはずである。

(通し番号・11553例) S.51.5.10, a. m. 6:51

(父がカードに絵をかくて、名あて遊びをしているときのことである。やめようとしたら、もつと書いてくれとたのむ。)

- ㊦ モチョット。モチョットモ カイテー。もう少し。もう少し書いて、(おねがい。)一㊦

(釈) とりたて助詞の「モ」が、追加する意味であることを知っていて、「これもあれも」の「も」を、副詞に承接して使ったのであった。しかし、そういうルールは日本語の共通語にはない。だから変な日本語だということになった。しかし、「少しも出来ない」と否定形を伴えば「も」は使用できるのだから、「も」の用法の一部が未習熟だったということになるのだろうか。「チョット」の前後に「モ」をつけた。

(通し番号・11565例) S.51.5.10, a. m. 7:26

(朝食後のあいさつ)

- ㊦ ゴチチョーチャママチダ。ごちそうさまでした。
㊦ ハイ ヨロシー。はい、よろしい。

(釈) 本来なら、「～でした」である。しかし、「です」と「ます」の用法差が不十分な状態のとき、体言を承けるのだから「～でした」のはずなのに、用言を承ける「～ました」で発話してしまったのである。もう2歳5ヶ月の子が、こんなに難しい文法規則を必死で学んでいるというわけだ。

(通し番号・11841例) S.51.5.21, p. m. 6:57

(夕食後にイチゴが出る。イチゴにヘタが付いて

いるのを、ツケテアルと言う。)

- ㊦ コレ チュケテ アル。苺にヘタが付いている。
㊦ ヘタガ ツイテ イル ノヨ。ヘタが付いているのよ。
㊦ コレ チュケテ ナイ ヨ。この苺には、ヘタが付いてないよ。
㊦ どういうことだろう。どの分にも、みんな付いているのよ。

(釈) 「ツイテイル」と言うべきを「ツケテアル」と誤った。このアスペクトはむずかしいようだ。自動詞アスペクトと他動詞アスペクトの混乱。

おわりに

本稿は、2歳5か月の双生児を対象にした事例研究として、具体的な生活場面での会話能力の発達を考察した。その方法は、数字を用いて統計処理を行うのではなく、専ら人生に一度しか起こり得ない発話例をそのまま、国際音声記号を用いて書き取るという、言わば文化人類学的ともいえるやりかたで行った。

該当双生児の会話の特色は、以下の五つである。

- ①発話意図の認識
- ②自我覚醒の認識
- ③レトリックの認識
- ④相互干渉の認識
- ⑤普遍化試行の認識

これらはそれぞれに関係があり、複合している。

①と②は相手の意見を聞き取って、さらに自己の思いを伝えるという会話の基本例の多くが観察される。④は双生児がことばは当然のこととして、その他にも共通する特徴が多いのは何故かを考えるのに有効である。③⑤は子供は少しずつ工夫を凝らして、成人語の習得に留まらずにことばを変えていくものだとことを考えさせてくれるだろう。

(参考文献)

- スティーブン・ピンカー 著、椋田直子訳『言語を生まみだす本能(上)(下)』(日本放送出版協会、1996年6月)
- 前田富祺・前田紀代子著『幼児語彙の統合的発達の研究』(武蔵野書院、1996年5月)
- 江端義夫「双生女児の方言会話における格助詞の形成過程について」(『言語学林1995~1996』三省堂、1996年4月)